

## 豊かな、明るい山村計画について

吉沢四郎

私は現状分析についての農村計画を山村の事例にしたがって述べてみたい。農村計画は「柱づくり」であり、生産と生活の統合ということが課題となると思います。そして、計画の主体として、人間的立場が考えられなければならない。また、計画の究極的な課題としては、「豊かな、明るい山村」ということがいわれる訳ですが、この「豊かな」というのは、経済的基礎づくりという側面であり、これには一方では、生産基盤の造成で、もう一つは労働力、土地、資本の合理的な結合としての個別経営の充実ということである。もう一つの「明るい」という側面は、近代的、人間的な社会づくり、つまり、コミュニティ形成ということである。このコミュニティ形成の一つのサイドには、生活環境づくりがあげられる。これには、集落配置、水の供給施設、排水施設、コミュニティ施設、教育施設、

医療施設などをどうするかという問題がある。もう一つには、合意形成の問題が指摘できる。村の共同意識をどうつくるか。共同の目標設定、共同の組織形成が重要である。これと結びついて、リーダーシップが問題となるであろう。

以上のことから、事例として、静岡県竜山村の村づくりを報告したいと思います。ここでは、昭和四二年に「ムツミ製材工場」、四五年に「内外縫製工場」、四六年に「花木（シキミ）生産」、四八年に「小径木加工工場」・「天竜材住宅販売株式会社」、五一年に「小角材製材」を誘致し、つくっている。村づくりの第一の柱である「豊かな」という側面は、このように立体的生産工場を形成したことによりみられる。第二の柱としては、第一次林構、山村振興農林漁業特別開発事業（昭和四四年～四七年）という事業を行ない、補助金を導入していく。第三の柱として、青山きんというリーダーが組織化をしていったことである。このように、特殊な事例を通して「村づくり」の類型化ができるものかと思います。

最後に、「村」の再評価を提唱したい。農業生産の組織という点で村は重要な意味をもつており、農村計画をする場合、「村」は歴史的使命をもつていいべきではないかと思われる。